

促成イチゴの安定多収のための育苗期の追肥について

農業研究センター 農産園芸研究所 野菜部

研究のねらい

本県のイチゴの促成栽培は、ポット育苗が主流となっているが、低温処理を行い年内の早い時期から収穫をねらう作型では、大苗を作ることが、花芽分化の安定及び多収のための条件になる。そこで、大苗生産と、花芽分化の安定を図るため育苗期の追肥について検討した。

研究の成果

- (1) 大苗を作るためには、育苗時の追肥に磷酸及び加里の含量の高い液肥を施用することにより生育を旺盛にし、クラウンを大きくする。しかも、磷酸及び加里の含量の高い液肥は、花芽分化への影響は少ない。
- (2) 磷酸及び加里の含量の高い液肥は、大苗定植の結果、収量は継続的に多く、最終的に約2割増収した。
- (3) 窒素成分の内、アンモニア性窒素が多く含まれる液肥は、花芽分化が遅れ、収穫始期が遅れイチゴの育苗時の液肥としては不適と考えられる。
- (4) 追肥の時期は、7月15日から始め、普通ポットは8月15日まで、低温処理苗は、7月25日までに3～4回なるべく等間隔に施す。
- (5) 追肥の方法は1ポット当たり約1株150ccの灌注を晴天日の午前中に鉢の床土をなるべく流さないよう行う。

第1表 苗の生育 8月27日調査 5株調査

試験区	展開第3葉				クワ径	クワ径によるNO ₃ -N
	葉身長	葉幅	葉柄長	葉色SPAD		
42-24-48区	10.02a	8.24a	14.78a	32.46 b	10.38a	14.00a
45-60-45区	9.66a	8.64a	13.30 bc	35.60a	10.60a	12.00a
36-60-60区	9.75a	8.72a	14.48ab	34.66ab	10.67a	1.00a
45-15-30区(対照)	9.74a	8.74a	12.32 c	34.10ab	9.88a	4.00a

注1：英小文字はDUNCAN'S MULTIPLE RANGE TEST による有意差を示す。
 同文字間には有意差はなく、同文字が無いものには95%の有意差がある。
 注2：試験区の数字は1回当たりの施肥量、単位はmg/ポット。45-60-45区はアンモニア性窒素を9mg含んでいる。

第2表 第一次腋花房の平均出蕾・開花 40株調査

試験区	出蕾	開花
42-24-48区	12/ 6.5±2.6	12/23 ±2.8
45-60-45区	12/15.1±5.1	1/ 1.8±5.4
36-60-60区	12/ 6.0±3.1	12/22.3±2.6
45-15-30区(対照)	12/ 3.9±1.9	12/20.5±1.7

第3表 頂花房の平均出蕾・開花・収穫初め 40株調査 / は月日
 ±後の数字は95%の信頼区間

試験区	出蕾	開花	収穫初め
42-24-48区	10/28.5±2.6	11/11.2±2.7	12/15.7±4.4
45-60-45区	11/ 5.3±4.6	11/20.7±5.0	12/28.8±6.6
36-60-60区	10/27.7±1.6	11/10.2±1.5	12/15.4±3.2
45-15-30区(対照)	10/26.4±0.6	11/ 9.9±0.6	12/11.4±1.4

第4表 年内収量及び収量内訳 1区20株当り

試験区	年内		商品果		下物		合計	
	個数	重量g	個数	重量g	個数	重量g	個数	重量g
42-24-48区	103.0	2,266	749.5	10,760	197.5	1,065	947.0	11,825
45-60-45区	65.0	1,569	750.0	10,812	134.0	652	884.0	11,464
36-60-60区	102.0	2,238	798.5	11,603	149.5	816	948.0	12,419
45-15-30区(対照)	101.0	2,140	702.0	9,789	112.0	885	814.0	10,674